

88. 地域レベルでのフードガバナンスを支援するフードスケープの活用

南山大学総合政策学部 准教授 太田 和彦

概要

近年、気候変動や資源枯渇など複合的課題が増す中、地域のレジリエンスを向上させるフードシステムの再構築が注目されている。本研究では、和歌山県田辺市と京都府京都市を事例として、フードスケープ（食の社会文化的景観）と社会関与芸術を組み合わせた取り組みが、地域のフードガバナンスにどのように寄与しうるかを検討した。①田辺市の「未来の給食」ワークショップでは、鳥獣害や少子化を想定したシナリオをふまえ、給食メニューと地域課題への提案が行われ、参加者間の対話や連携意識の深化が示された。②京都市のフードポリシー・カウンスル関係者へのインタビューからは、個人の経験や語り（ナラティブ）が制度形成の正当性や方向性を支える一方、単純化やバイアスのリスクが指摘された。さらに文献レビューでは、ガバナンスの多元的利害を調整する上でナラティブの批判的検討や参加型手法の評価指標の重要性が示唆された。以上の①・②の結果より、フードスケープと社会関与芸術を組み合わせた介入は、地域の食習慣や記憶、懸念や希望を可視化・言語化し、多世代・多主体の協働を促す有効な契機となり得るが、選抜バイアスへの配慮、質的・量的評価の整備、長期的な追跡など慎重な設計が欠かせないことが明らかとなった。

背景および目的

近年、天然資源の枯渇や気候変動、不平等の拡大、急激な都市化、食料流通のグローバル化など多面的な課題をふまえ、世界各国で地域レベルのフードシステムの再構築が求められている。中でも地域固有の食文化やコミュニティの連携を活かすフードガバナンスの重要性が指摘されており、2000年代後半からはフードポリシー・カウンスル（FPC）の設置をはじめとした市民参加型の取り組みが広がり始めている。こうしたガバナンスの形成において、住民同士が食を媒介に互いの価値観・経験を共有し、新たな連携を創発する手段として「フードスケープ」の概念が注目されている。フードスケープとは「フード（食）＋ランドスケープ（景観）」を組み合わせた造語で、人々が日常生活の中で経験する食に関わる空間や景色——農林水産の現場、市場、流通経路、料理の仕方や食卓、レストランなど——にまつわる社会的・文化的背景などを包括的に捉える観点を指す。人々がどのように食と関わるかという視点から、フードスケープを通じて地域の食習慣や記憶、将来の懸念や理想を可視化し、特に社会関与芸術と組み合わせることで、多様なステークホルダーを巻き込む事例が欧州を中心に報告されているが、日本国内においては具体的な寄与や効果の検証が十分とはいえなかった。

そこで本研究では、下記の2点を主な目的とした：①和歌山県田辺市におけるフードスケープと社会関与芸術を組み合わせた活動を事例とし、フードスケープが、多世代・多分野の連携を促進する触媒となり得るかを検証する。②京都府京都市のフードポリシー・カウンスル（行政・市民・研究者の協働組織「食と農の未来会議・京都」）の関係者への聞き取りと文献調査を通じて、個人の経験や語り（ナラティブ）が制度形成の正当性を支えるナラティブとして機能する要件を明らかにする。

【資料】 食と農の未来会議・京都 ホームページ <https://fpc-kyoto.net/>

方法

①田辺市のアートイベント 紀南アートウィークにおいて、2023 年 10 月に「未来の給食」ワークショップを開催し、参加者 8 名から視覚的資料と参加者の語り、フィールドノート、写真記録を得た。得られたデータは Gioia メソッドを通じて分析し、主要なキーワードや概念同士の結びつきを把握した。また 2024 年 2 月にグループインタビューを実施し、ワークショップ後の 4 ヶ月の間どのような変化があったかの聞き取りを行った〔結果.1〕。

②「フードポリシーカウンスル 食と農の未来会議・京都」（以下、「未来会議」）と関係する 4 名（研究者、非営利団体スタッフ、行政職員、学生 各 1 名）への半構造化インタビューを実施し、過去に実施されたフードスケープを介したゲーミング・ワークショップ(Mangnus et al. 2019; マックグリービーら 2021)の体験や、制度形成のプロセスにおいて関係者の経験や語りはどのように反映されるかを中心に聞き取りを行った。また、文献調査では、市民参加型フードガバナンスに関連する国内外の先行研究 38 本をレビューした〔結果.2〕。

【資料】「未来の給食」ワークショップ参加申し込みページ <https://kinan-art.jp/info/13661/>



図 1. 「未来の給食」ワークショップの様子（2023 年 10 月 21 日）

『サバイブするための思考のレシピ 紀南アートウィーク 2022-2024 の実践』（印刷中）より

結果とまとめ

〔結果.1〕 参加者は、グループごとにランダムで割り当てられた未来のシナリオ（今回は「気候変動と自然災害の増加」「鳥獣害の増加」をダイスロールで決定）に対して、「少子化に伴い閉校となった小学校を作業場・情報交換の場所として活用する」「シカなどを精肉・調理可能な設備を公的支援で充実させる」など、特に地域の食料安全保障の向上を重視した提案が行われた。これらは未来の給食のメニュー（鹿肉を活用した給食）と照応して可視化された。また、アイデアを実現するために、実際にどのようなステークホルダーと協働するべきなのか、関連する行政の部署はどこなのかという点が話し合われた。

〔結果.2〕 インタビューでは、全員が、個人的経験の共有が交流を深め、互いの問題意識を重ね合わせる上で重要であることを述べた。出身地と京都を比較することで京都の食慣行やローカル・フードシステムの特徴について話す機会を得たり（協力者のうち 3 名は京都出身ではない）、仕事や修学以外の時間で活動が続ける上でワークライフバランスをとることの難しさなど共通点の多い事柄を起点に話を広げ、制度上の支援策を考える際に共

通の方向性を見出していくことが多かったと語った。ただし、この語りが単なる思い出話や愚痴に留まらずに制度形成の基盤となるためには、語りの内容を多層的に扱い、必要な資源や連携先のイメージを明確にする場（複数回のワークショップ、専門家を交えた勉強会など）の存在、また、映像・音声での食に関する語りのアーカイブや、動画やシリアスゲームなどを通じた可視化、マルシェでの試食と合わせた講演会など、フードスケープを介して経験を共有する仕組みの準備・提供が鍵となることが指摘された。

文献調査では、食料や環境のように利害が多層的で複雑な問題領域では、共有ビジョンとして採用されたナラティブ（例：「食べ物はコモンズだ」）で政策の方向性は影響を受けやすいが(Smaal et al. 2021 他)、同時に耳触りの良いナラティブによって現実の矛盾が覆い隠されるリスクもあり、ナラティブの批判的検討が求められている(Donner et al. 2024 他)。そのためには、地域の文脈に合わせた多様な市民参加の方法が準備される必要があるが、取り組みの具体的な評価指標は十分に整っておらず、研究や実践においてどのようなプロセスがどれだけ影響を及ぼすのかを検証する必要があることが指摘されている(Affre et al. 2024 他)。

考察と展望

本研究は、和歌山県田辺市での「未来の給食」ワークショップと京都府京都市のフードポリシー・カウンシルを事例に、フードスケープを介した社会関与芸術が地域のフードガバナンス形成に及ぼす影響を調査した。その結果、食や空間に紐づく記憶や感情を可視化することで、多様な主体間で新たな連携や制度形成を促進する可能性が示された。一方、文献調査で示されたように、ナラティブの活用は、共感を得やすいが複雑な課題を単純化するリスクも伴う。多面的な検討の場や、アーカイブ化、質的・量的評価指標の整備や長期的な追跡調査による有効性を検証が不可欠であり、そのための取り組みが必要である。本研究で協力をいただいた紀南アートウィークや食と農の未来会議・京都はその役割を担っているといえるだろう。また、ゲーム性や創造性は、参加者の当事者意識を強化する手段となり得る一方で、地域や分野間の温度差を超えて連携を図るための調整や合意形成の場の継続的設計も欠かせないといえる。こうした両面的な取り組みの蓄積が、地域の持続可能性を向上させるフードガバナンスの構築における基底となると考えられる。

なお、本研究の限界として、以下の2点があげられる。まず、サンプル数の少なさによる妥当性の限定である。本研究は萌芽的研究として実施されたが、今後はワークショップやインタビューの対象を拡大し、立場や関心の異なる市民・組織・行政職員など幅広い協力を得ることが必要となる。次に、定量的指標や評価軸の設定である。文献調査においても指摘されていたように、ワークショップ参加者の意識・慣行変化調査との組み合わせや、行政の施策転換などのマイルストーンを設定した追跡を今後は実施したい。

(完)

引用文献

- 1) Affre, L., Guillaumie, L., Dupéré, S., Mercille, G., & Fortin-Guay, M. (2024). Citizen participation practices in the governance of local food systems: A literature review. *Sustainability*, 16(14), 5990.
- 2) Donner, M., Mamès, M., & de Vries, H. (2024). Towards sustainable food systems: a review of governance models and an innovative conceptual framework. *Discover Sustainability*, 5(1), 414.
- 3) Mangnus, A. C., Vervoort, J. M., McGreevy, S. R., Ota, K., Rupperecht, C. D., Oga, M., & Kobayashi, M. (2019). New pathways for governing food system transformations: a pluralistic practice-based futures approach using visioning, back-casting, and serious gaming. *Ecology and Society*, 24(4), 2.
- 4) Smaal, S. A., Dessein, J., Wind, B. J., & Rogge, E. (2021). Social justice-oriented narratives in European urban food strategies: Bringing forward redistribution, recognition and representation. *Agriculture and Human Values*, 38(3), 709-727.
- 5) マックグリービー・ステイーブン, 田村典江, ルブレヒト・クリストフ, 太田和彦, 小林舞, スピーゲルバーク・マキシミリアン. (2021). 未来を知り, 遊び, 実験する: ソフトシナリオ手法を通じたフードポリシーの共創. *環境科学会誌*, 34(2), 46-65.